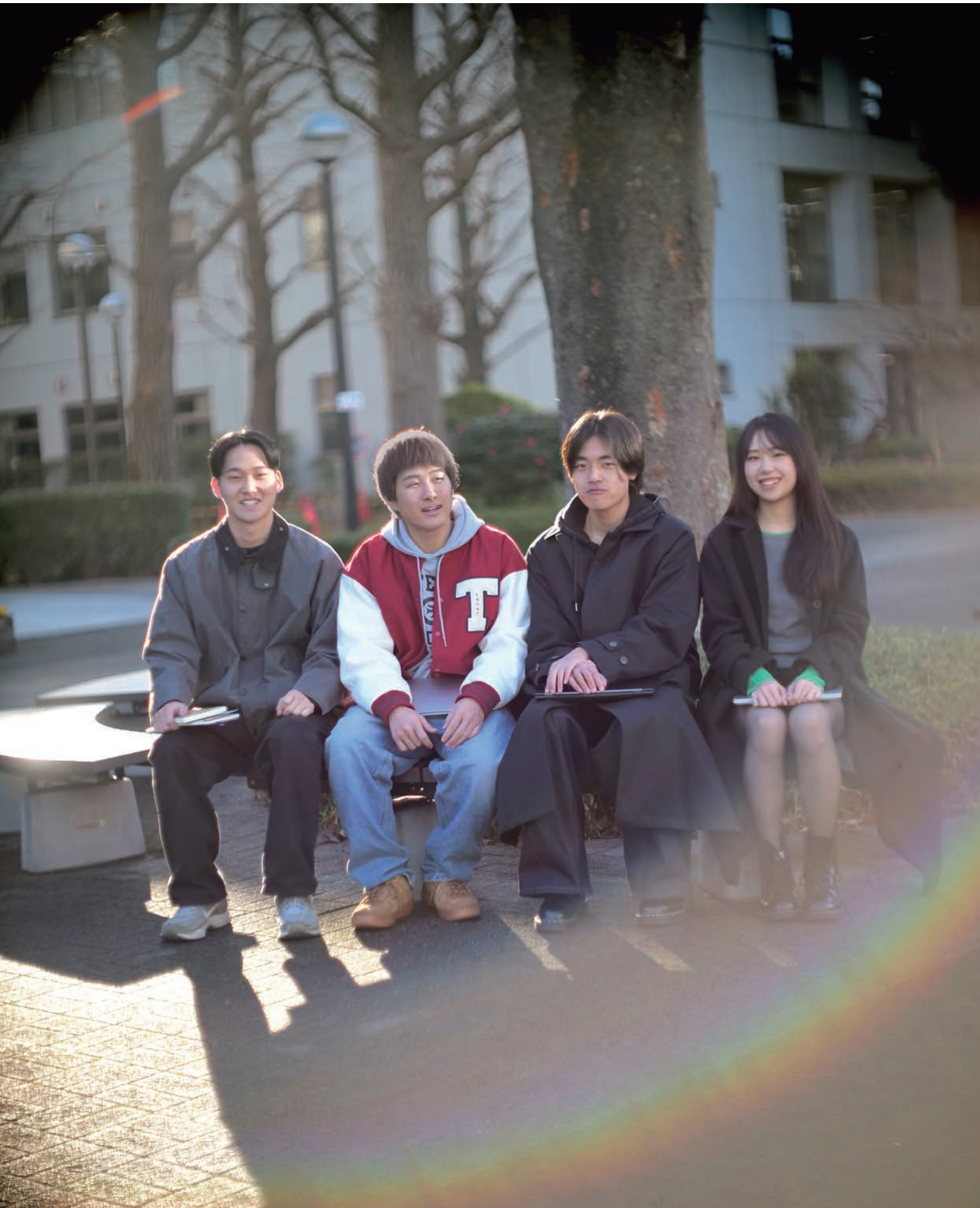


東京経済大学報

2025年度
第58巻 第2号

撮影：ハービー・山口（1973年卒） 場所：2号館前





2026年の新春を迎えて

皆さま、明けましておめでとうございます。2026年の新年にあたり、学長としてのご挨拶を申し上げます。

本学は、明治・大正期の大実業家大倉喜八郎が明治33年(1900年)に赤坂葵町に創設した大倉商業学校を淵源とします。その商業学校は1920年に大倉高等商業学校に昇格し、1944年に大倉経済専門学校と改称し、終戦後の1949年に新制の東京経済大学としてスタートを切りました。それ以来今日まで、本学は一貫して自由な学問研究に支えられた質の高い教育を行う「大学らしい大学」となることを目標にしてきました。

その後、本学は4学部1プログラムを擁する「社会科学系総合大学」として発展し、昨年10月23日に創立125周年を迎えました。この創立125周年を機に本学は、大学の今までの伝統・歴史、現在、そしてこれからの見つけ直し、本学のブランドパーパスである「本学の社会にとっての存在意義、存在理由」の検証を行うことを目的に、リ・ブランディングに着手しました。

その結果生まれたのが、「語り会おう。東京経済大学で」というメインコピーです。これは、学生と教職員が、本学の国分寺キャンパスを中心としたリアルな場で、実際に「会って」「語りあう」ことで、互いの「問い」に呼应しあい、それを深めあっていく姿勢を提示したものです。この言葉が、本学の新たな未来を紡ぐ第一歩となるよう、皆さまのご理解、ご協力のほど、どうかよろしくお願いします。

私は2018年4月に学長に就任しましたが、今年の3月いっぱい学長を退任いたします。8年間に及ぶ学長時代を振り返りますと、さまざまなことが蘇ってまいります。以下、本誌に寄稿した幾つかの拙文に言及することによって私の学長時代を振り返ってみたい。

学長就任直後に「『アカデミズムに裏打ちされた実学教育』を実践する大学へ」(2018年度第51巻第1号)と題して、6頁にわたって私の大学運営の基本的考え方を展開しました。ここで私が表明した「アカデミズムに裏打ちされた実学」というキーコンセプトから、よりシンプルでインパクトのある「考え抜く実学」という言葉が生まれました。この簡明な言葉は現在、本学の教育研究のあり方を表すスローガンとして定着しています。

本学は2020年10月23日に創立120周年を迎えましたが、ホテルオークラ東京で開催予定だった「創立120周年記念式典・祝賀会」をはじめとしたさまざまなイベントはコロナ禍のために中止またはオンラインでの開催となりました。そこで私は、「創立120周年記念式典に代えて—コロナ危機下の本学の姿勢と新構想策定委員会答申について—」(2020年度第53巻第1号)と題して、卒業生と新入生に対する学長メッセージ、オンラインでの授業の様子、創立120周年を迎え学長として誇りに思うこと、2020年を起点とした10

年後を見据えた新構想の概要について報告し、コロナ禍を契機に新しく設けられた「東京経済大学修学支援特別奨学金制度」への寄付を呼びかけました。

2021年新春号(2020年度第53巻第2号)では「本学のSDGs宣言に向けて」を寄稿し、「地球規模の連帯の精神」と「進一層の精神」でもって、本学は教育・研究機関としてSDGsの達成の一翼を担っていくという決意表明をしました。この私の声明は2021年4月に大学の公式宣言である「東京経済大学SDGs宣言」に結実しましたが、これをさらに前進すべく2022年新春号(2021年度第54巻第2号)に「国分寺学派宣言—国分寺から世界へ—」を発表しました。これは、本学がこれからの時代の「新しい地域主義」のあり方を市民と一体となって考え抜く(国分寺学派)の拠点となることを高らかに表明したものです。

このように、私の学長就任期間中に本学はコロナ禍をはじめとした幾つかの困難に遭遇しましたが(コロナ禍に対する本学の対応や取り組みについては2022年新春号に掲載)、他のどの大学よりも「大学らしい大学」となるという目標を決して見失うことなく、日々の教育研究活動に邁進してきました。また将来に向けた教学改革は滞ることなく進展しています。私の下で策定された新たな「教学ビジョン(10年後を見据えた新構想)」に基づいて実行されてきたゼミ・カリキュラム改革、英語と多文化共生力の強化、データサイエンス教育の推進などある程度成果が得られたのではないかと考えています。

国分寺キャンパス第2期整備事業につきましては、今年の9月にフェーズ1の建物が竣工予定となっています。また、正門前の女子学生向けの教育寮もこの3月竣工予定となっています。

18歳人口の減少という逆風は相変わらず強いですが、本学を「東京・多摩を代表する大学」、「誰もが一目置く存在感のある大学」にすべく教職員一同全力を尽くす覚悟でいます。皆さま方の一層のご理解とご支援を、よろしくお願いいたします。



東京経済大学
学長
岡本 英男



謹んで新春のご祝詞を申し上げます

2026年1月

皆さまには平素より本学へのご支援・ご協力を賜り、有難く厚く御礼申し上げます。

本学は昨年2025年10月、創立125周年を迎えました。格別の記念事業は行いませんでしたが、11月1日(土)ホームカミングデーには数多くの卒業生及び教職員OB・OGが集い、懐かしさも賑やかに楽しい一日を過ごすことが出来ました。また、12月6日(土)には大倉記念学芸振興会開催の村上勝彦名誉教授による記念講演「大倉喜八郎と渋沢栄一」が開催されました。

125周年に因んだ「12,500円募金」は現在も継続実施中であります。

開けて2026年(令和8年)の干支は60年に一度の丙午、情熱と行動力・独立心が際立つ勢いのある年、学び努力したことが一気に芽を吹く勢いのある年になるようです。

私は2023年6月理事長重任に際して次の4つの方針を掲げました。

1. 財政収支の改善と安定化
2. 国分寺キャンパス第2期整備事業の促進
3. 法人経営を担う次世代人材の掘り起こし
4. 魅力ある学部・学科造り

とりわけ、2024年の出生数が70万人を下回り2040年代には18歳人口も同様に下回ることが予想されます。本学が高校生や保護者の方に選ばれ、高校の先生方から推薦して貰える魅力ある大学造りは喫緊の課題であります。

そのため教学においては「特別招聘教授」制度を導入。加えて地方出身の優秀な学生を支援する「めざせ!大倉喜八郎進一層奨学金」(入学前予約採用型給付奨学金)を2026年度よりスタートさせます。

また、私的な話で恐縮ですが、小生の理事長としての任期は今年の6月半ばの評議員会までとなります。2008年(平成20年)6月監事に就任し9年、2017年(平成29年)理事に就任し財務担当常務理事3年、理事長6年の計9年、通算18年の永きに亘りまして大学経営に携わることが出来ました。

この間、教職員及び卒業生の皆さまそしてお取引先の皆さま方には多大なご支援とご協力を戴き、この新春のページをお借りしまして厚く御礼申し上げます。

監事としては本学に内部監査室を設置して三様監査体制を構築し、また私大連盟・監事会議メンバーとして監査マニュアル「私立大学の明日の発展のために」の編集に携わったこと等を印象深く感じています。

理事長としての一期目、2020年から3年間は文字通り新型コロナウイルス感染症対策の3年間であり、2020年3月海外留学生の一斉帰国の指示に始まり全在生対象に一律5万円の「修学支援特別奨学金」支給等、「緊急事態宣言」下での難しい新型コロナウイルス感染症対策に学長はじめ教職員の皆さま方と辛苦を共にすることになりました。詳細については「百二十年史通史編」刊行の挨拶をご覧ください。

これまで新春のご挨拶の中で、例年株式相場における十二支にまつわる格言を紹介して参りました。午年から未年、申年にかけてどうなるでしょうか?

最後の機会になりますので改めて全文を紹介します。

【辰巳天井、午尻下がり、未は辛抱、申酉騒ぐ、戌笑い、亥固まる、子は繁盛、丑はつまずき、寅千里を走り、卯は跳ねる】

どうも政情が不安定での新年スタート、ひたすら皆さま方の平穏無事な一年とご多幸を心からお祈り申し上げます。



学校法人東京経済大学
理事長
菅原 寛貴

Concept

「レジデンシャル・エデュケーション」

— 日常生活が学びの場



2026年4月
OPEN

「学生寮」という 学びのかたち

正門前に女子学生寮『葵レジデンス』オープン

副学長(学生支援担当) 羽貝 正美

2026年4月、本学園分寺キャンパス正門前に38室からなる女子学生寮の『葵レジデンス』がオープンいたします。住み込みの管理人(女性)が常駐し、セキュリティにも十分配慮した設計になっています。現在、3月下旬の竣工を目指して着々と工事が進んでいます。振り返れば、第2次中期計画(2021~2025年度)に「2018年度から2020年度にかけて取得した正門前土地の活用方法の検討」が明記されておよそ6年。この間、コロナ禍の影響もあり、具体的な検討作業は2022年に入ってからとなりました。この貴重な校地を生かすべく、学内の関係委員会によって順次、基本方針、答申等が決められたのち、学内の諸会議・説明会等にて意見をいただきながら設計・運営の検討が進められ、設計・施工会社の選定、工事費の決定、基本設計の確定等を経て2025年6月に着工となり現在に至っています。

18歳人口の急減が懸念される社会環境にあつて、本学の魅力を発信し、意欲的な志願者の増加に資するような施設はいかなるものか。早い段階で打ち出された基本方針が「学生寮」であり、「女子学生、地方海外」という要素でした。また「どのような」という観点からは、「単なる学生マンションではなく、共同生活を通して学生の学びや成長につながるような施設」というビジョンが掲げられました。

検討に検討を重ねた結果、最終的に確定したコンセプトは「レジデンシャル・エデュケーション」。文字通り、日常生活の場と空間、そして時間を広く学びの場とするものと思われまます。

端的に言えば、学生寮はそうした学生すべてにとって、少しずつ自分に自信を持ち精神的に立ち立っていくための準備の場所であり、時間です。調理や食事をきっかけに自然と始まる寮生同士のおしゃべり(硬く言えば対話や共話、そうした交流が生まれるような設計です)、季節ごとの楽しいイベントとその準備などもあるでしょう。寮の生活ルールを互によく話し合いながら決めていくという自治的で自律的な活動もありまます。学習や進路について夜を徹して語り合う時もありそうです。これら日常をサポートする存在がRA(レジデント・アシスタント・1学年数人)と呼ばれる存在です。すでに2024年度から本学の国際交流会館で導入されていますが、管理人とも連携協力しながら寮生活を互いにより暮らしやすいものにするためのサポート役です。

とという考え方です。もとより新入生が大学生活に期待するものは人によってさまざまです。その中で一人暮らしをする、あるいは遠方から通う新入生の思いは、そうではない学生と比べてまた固有のものがあると思います。東京での初めての一人暮らしになじめるかどうか、首都圏出身であるけれど通学時間が相当に長く通い続けられるかどうか、資格の取得など自分の目標に向かって最大限有効に時間を使いたい、友人ができるかどうか、生活環境の安全面はどうかかなどなど。大学生活への期待感とともに、心

東京経済大学に生まれる『葵レジデンス』は、このように、寮生活の全体を通して実践される新しい「学びのかたち」です。学部・学年、出身地をはじめ、異なる価値観を持つ他者の存在に気づかされ、互いに尊重し合う人間関係を築きながら「社会性」を身につけて成長を遂げる。何事も互いに協調性をもって話し合えなければ前に進めない。そのように学び、培ったものを寮生以外の周囲の仲間にも伝え共有していく。この学生寮がそうした学生を育む場となつてほしいと願っています。



写真1 開校間もない頃の大倉商業学校校舎

創立125周年を2025年に迎えた東京経済大学は、創立時から現在まで、取りまく環境がたびたび大きく変わるなか、さまざまな経験を通じて発展してきました。その歴史は大学への昇格となった1949年でまず二分され、その前半は商業学校から高等商業学校への昇格となった1920年で、その後半は経済系単科大学から社会科学系総合大学への歩みを始めた1995年で、それぞれ前後に区分されます。このように125年の歴史が20年、29年、46年、30年と4期に分かれるなかで、第3期がやや長いのは、経営学部設置以降、3番目の学部であるコミュニケーション学部設置への試行錯誤のやや長い時期があったからです。写真1は125年前の創立時の校舎です。

創立時から現在までの長期間、変わらずに堅持されてきたものがあります。それは創立時の建学の理念であり、現在の大学の理念とされている「進一層」と「責任と信用」という気概です。本学の前身、大倉商業学校の創立者である大倉喜八郎は、日本の経済社会が厳しい状況にあるなか、ちょうど関東大震災が起こる直前ですが、ある会合で皆を鼓舞激励すべく話したのが、進一層という気概でした。困難に遭遇し、難局にあつたときは、左顧右べんし、一歩退いて考えるような消極的な覚悟では駄目だ、逆にその難局を突破すべく、勇気を奮いおこし、前進しなければならぬ、それが進一層というこ

とだ、と述べたのです。大倉はまた、何事をなすにも最も大切なのは信用で、信用のない人間は首のない人間のようで、人間として少しの値打ちもない、しかし信用を得るのにはなかなか難しく、急に得られるものでなく、毎日毎日の仕事を通じてだんだんに得られるものだ」と話しました。さらに責任を立派に果たすには非常に勇気が必要で、一度約束したことは首をはねられても必ず実行するというほどの覚悟がいるとも言いました。この責任と信用を学校独特の特徴としてほしいと生徒、先生へ話したのは、じつは90歳で亡くなる3カ月前のことです。大腸癌に侵されていた彼の遺言だったと思われまます(歳は満年齢)。

125年前の学校創立にあたって大倉を助けて創立委員となったのは3名で、大倉と同郷・新潟出身で陸軍軍医総監だった石黒忠恵(ただのり)、大倉の盟友で近代日本経済の父とされる渋沢栄一、大倉と親しく帝国大学(東京帝国大学の前身)初代総長だった渡辺洪基です。大倉は経済活動一筋でしたが、幕末維新の頃の3名の政治的立場はさまざまで、石黒は討幕思想を強く抱き、渋沢は攘夷討幕運動から開国・徳川家守護へ転じ、渡辺は佐幕派でした。その後の1877(明治10)年頃、彼ら3人はそれぞれに大倉と知り合い、お互い信頼を高めるなかで、ほぼ20年後の学校創立へ協力したのです。大倉よりそれぞれ8歳、3歳、11歳若い彼らは、大倉の期待に応え、

学校のために生涯尽力します。石黒は当初から23年間も学校の経営責任者である理事(一人のみ)を、さらに亡くなる5年前の91歳まで協議員(現在の理事格)を、渋沢は大倉と共に学校の監事となり、亡くなる91歳まで同じく協議員を務め、一番若い渡辺は初代の校長にあたる督長になりますが、開校翌年に亡くなりました。



写真2 46歳頃の大倉喜八郎

日本の商人は近代的な商売のやり方に習熟する必要があると強く感じました。なぜなら欧米行きは直接の理由が、アメリカ議会で粗製乱造の日本茶が問題とされ、その声価が失墜し、その信用回復が必須とされたため中央茶業本部幹事長だった大倉がアメリカ行きに適任者

とされたことにあります。彼は帰国直後に、写真3の小著『貿易意見書』を著し、粗製乱造品を輸出するなど詐欺破廉恥な商売の日本商人を厳しく批判し、責任と信用の重要性を述べたのです。

その頃の彼は、経済競争力の強い欧米商人が日本国内で自由に活動できるようになる内地雑居、つまり条約改正は時期尚早と考えていました。しかし早晩、それは不可避と思ひ、そのためには欧米商人に伍すべく、国内だけにとどまらず海外にも積極的に出かけていく進一層精神を抱いた商人の育成が必要だと考え、条約改正発効の前年に財団法人

大倉商業学校を設立し、開校準備に入ったのです。大倉の心中での進一層、責任と信用の気概は、先に述べた関東大震災時の85歳、死去直前の90歳のときからではなく、それぞれ学校設立を決意した60歳、『貿易意見書』を著した48歳のときからでした。さらに遡れば、進一層は郷里において10歳代で学んだ陽明学の「知行合一」の精神に、また責任と信用は江戸に出てほどなく頃頃の20歳代前半、『心学先哲叢集』を編纂するなかで学んだ、勤勉・儉約・正直を旨とする石門心学の教えに、それぞれ源を発するものといえます。

東京経済大学の歴史

- 1837 大倉喜八郎 現在の新潟県新発田市に生まれる
1860 『心学先哲叢集』を編纂する
1872 民間人として初めて自費で長期欧米視察を行う
1884 2度目の欧米視察を行う
1886 『貿易意見書』を著す



写真3

1898 商業学校設立趣意書を公表
1900 東京・赤坂葵町に大倉商業学校を開校

1920 高等商業学校への昇格

1944 大倉経済専門学校と改称
1946 赤坂葵町から国分寺に移転

1949 大学へ昇格

- 1964 経営学部を設置
1970 大学院を設置、経済学研究科修士課程を設置
1976 大学院に経済学研究科博士後期課程を設置
1984 大学院に経営学研究科修士課程を設置
1986 大学院に経営学研究科博士後期課程を設置

1995 日本初のコミュニケーション学部を設置

- 1998 経営学部に流通マーケティング学科を設置
1999 大学院にコミュニケーション学研究科修士課程を設置
2000 現代法学部を設置
2001 大学院にコミュニケーション学研究科博士後期課程を設置
2002 経済学部に国際経済学科を設置
2004 大学院に現代法学研究科修士課程を設置
2017 キャリアデザインプログラム導入
2022 コミュニケーション学部学科改組によりメディア社会学科と国際コミュニケーション学科を設置

2025 創立125周年

第1期 前半

第3期

後半

第4期

デフリンピック という舞台で、 世界とつながる



陸上競技(デフ)アスリート

山田 真樹 さん

Maki Yamada

東京経済大学コミュニケーション学部卒業

2025年11月、東京で開催された第25回夏季デフリンピック競技大会 東京2025。聴覚障がい者のオリンピックとも呼ばれるこの国際大会に、陸上競技日本代表として出場したのが、本学コミュニケーション学部を2020年に卒業した山田真樹さんです。日本初開催、そしてデフリンピック100周年という記念すべき大会で、競技への想い、大学時代の学び、そして未来への展望を聞きました。

特別な大会への想い

— 東京2025デフリンピック出場が決まったときのお気持ちを教えてください。

デフリンピック100周年という特別な大会であり、さらに日本で初めての開催でした。その中で日本代表選手として出場できたことに、大きな喜びを感じています。デフリンピックのポスターモデルにも選ばれ、プレッシャーもありましたが、その分、期待に応えたい気持ちも強く持っていました。

コミュニケーション学部で磨いた力

— コミュニケーション学部での学びは、今の活動にどう生かされていますか。

今は陸上競技だけでなく、講演活動にも取り組んでいます。人前で話す機会が多いため、卒業生としてふさわしい表現や内容になるよう、常に心がけています。周りからも「フレンドリーだね」と言っていたことがあり、それはコミュニケーション学部の授業などで、人前で自分の考えや意見を発表する経験があったからだと思います。

あったからだと思います。

— 大学時代の印象に残っている経験について教えてください。

特に印象に残っているのは、佐々木裕一先生との面談です。ゼミ選択についての相談をしたときに「君は樂觀すぎる。社会はそんな甘くない。考える力をしっかりと身につけなさい」と言っていました。この言葉は今も心に刻まれています。

また、大学1年生のときに関東学生陸上競技対校選手権大会の4×400メートルリレーと一緒に走った先輩の存在も大きいです。レース中盤まで順位があまり良くなかったのですが、諦めない心を強く持って順位を上げてくれたことで、最終的にはメダルを取ることができました。最後まで諦めずに戦う姿勢は、デフリンピックでの取り組みにもつながっています。

— どのように学業と競技を両立されましたか。

耳が聞こえないため、大学においてノートテイクをしていただきました。他の学生がサポートとして先生の言葉を文字に書き写してくるのです。東経大は、耳が聞こえなくても安心して授業を受けられる環境を整えてくれました。

世界とつながり、視野が広がる

— 競技を続けるモチベーションは何ですか。

「勝ち続けたい気持ち」です。初めてデフリンピックで金メダルを獲得したのは、大学2年生のとき。2017年のトルコ大会でした。これが、一般の聞こえる人たちに認めもらえるきっかけになり、勝つことへの喜びを覚えた瞬間でもありました。



そのトルコ大会では2位だったウクライナの選手と仲良くなり、次回大会のブラジルで再会する約束をしました。しかし、2022年にロシアによるウクライナへの侵攻が始まってしまいました。彼のが心配で、陸上協会としてクラウドファンディングを実施し、ウクライナ選手が大会出場する際の負担軽減に役立てていただきました。ブラジル大会で奇跡的に再会できたときには思わずハグをして、励ましの言葉をかけました。

ところがそのブラジル大会では、日本選手団内で新型コロナウイルス感染者が増え、私は試合に出られないまま帰国することになってしまったのです。落ち込む私に、ウクライナの選手からSNSで「大丈夫？

知らなかった世界を知ろう

— 今後、どのような活動をしていきたいですか。

これから、ろう者に対する理解啓発活動を続けていきたいです。2021年の東京オリンピックパラ

— 読者にメッセージをお願いします。

ぜひ、自分の知らなかった世界に触れてほしいと思います。私は、スポーツを通して世界を知ることができました。知らなかった世界に触れることで、視野が大きく広がります。私の活動が、皆さまにとってのきっかけとなればうれしいです。

快拳!



山田選手が400mと4×400mリレーで金メダル、200mで銀メダルと、合計3つのメダルを獲得しました! ご本人からの喜びのコメントをお届けします!

今回、デフリンピック陸上日本代表として200m・400m・4×400mリレーに出場し、金メダル2つと銀メダル1つを獲得できました。快晴の下、皆さまの応援が大きな力になりました。大学の横断幕を掲げるという夢も叶い、在学中に学んだスキルは国際交流にも役立ちました。

東京経済大学OBとして恥じない結果を残せたのは、皆さまのおかげです。ありがとうございました。



新プログラム 紹介

コミュニケーション学部生限定の

「国際観光プログラム」が2027年度から始まります

コミュニケーション学部教授 中村忠司



▲「観光と文化」の講義

国際観光プログラムは、インバウンド観光をはじめ国境を越えた人の移動が大幅に増加している中、卒業後に旅行会社、エアライン、外資系ホテル等の国際観光分野においてコミュニケーション学部生が活躍できるように、実践的な英語力と観光に関する専門性を備えたプロフェッショナル人材の育成を目的としています。本プログラムが定義する国際観光とは、「日本人の海外旅行や訪日外国

人旅行など、ビジネスを含めた国境を越える各国間での観光」を指します。

最初のプログラム生を2026年度入学生を対象に募集して、定員は20名程度を予定しています。プログラム科目は、「国際観光ワークショップa/b」「観光と文化」「観光ビジネス論」「ホスピタリティ産業論」「グローバルキャリア論」「異文化マネジメント論」「英語と異文化理解A」です。

このうち、プログラム生限定科目は「国際観光ワークショップa/b」です。各科目のテーマは「国際観光による地域活性化」と「これからの国際観光」であり、旅行会社、航空会社、ホテル等の社員をゲスト講師として招聘するワークショップ型の授業を予定しています。

本プログラムを通じて、コミュニケーション学部生が国際観光の未来を切り拓く担い手として大きく成長することを期待しています。

開催報告

コミュニケーション学部開設30周年記念シンポジウム

「環境化するAIと

コミュニケーション学の未来」を終えて

記念シンポジウム実行委員長
コミュニケーション学部教授

光岡寿郎

去る11月8日、コミュニケーション学部開設30周年を記念したシンポジウム「環境化するAIとコミュニケーション学の未来」が、国分寺キャンパス進一層館で開催されました。本学からは佐々木裕一コミュニケーション学部長、柴内康文教授が登壇し、コミュニケーション学部でも教鞭をとられた東京大学名誉教授の西垣通先生から基調講演を頂きました。

当日の議論はとても豊かなものでその内容を紹介することは難しいのですが、シンポジウムに通りすぎるテーマは、2020年代に浸透する新しい技術としてのAIを、同時代を生きる人々、そして社会との接点においてどう理解すべきかという問いでした。とりわけ、AIはあくまで技術として私たちとコミュニケーションをとっていること、加えてAIという技術の背景には西欧近代社会の持つ一神教的な世界観が存在していることが指摘さ

れました。AIへの対応は、今後のコミュニケーション学部の教育においても取り組むべき重要な課題の1つであり、学部としても貴重な学びの機会となりました。当日は、多少肌寒さはありましたが好天に恵まれ、卒業生を含めて80名以上の来場者を迎えることができ、シンポジウム後の懇親会も含め盛況な会となりました。



在学生のリアルな声!

輝くTKU生 インタビュー vol.2

経営学部3年
宮下 登羽選手

経済学部4年
西海 広亮選手

22年ぶりの頂点へ
最後まで攻め続けた2,000メートル

埼玉県戸田ボートコースにおいて、2025年9月3日から7日の日程で行われた第52回全日本大学ローイング選手権大会(インカレ)。男子ペアで優勝した西海広亮選手と宮下登羽選手に、22年ぶりの快挙を振り返ってもらいました。

——優勝が決まった瞬間、どんな気持ちでしたか。

西海 興奮と喜びで、感情が一気に出ました。思わず涙がこぼれました。

宮下 正直、まだ実感がありません。目標は高く優勝を目指していましたが、「本当に達成したんだ」という驚きが大きいです。

——決勝レースの勝負どころを教えてください。

西海 1,000メートルからさらにペーシングを上げていくところです。これまでの大会では出し惜しみして負けることが多かったのですが、今回は最初から力を出して、1,000メートルからは全力で漕ぎ続けました。

宮下 1,500メートル地点では2位と6秒差があり、練習の成果が最も発揮されたレースになりました。ただ、日本大学の追い上げがすごく、ゴール時は「負けたかも」と思いました。

西海 ガス欠状態で追いかけられましたが、全力を出し切っていたので悔いはありませんでした。4年間で最高のレースができたと思います。

——インカレの1カ月前にペアに転向されたそうですね。

西海 もともとは4人乗りで大会に臨むつもりでした。ところが、東日本選手権でトップの大学と差があって、優勝するためにペアに切り替えました。僕たちは



体が細くて軽く、フィジカルでは勝てない。だから無駄な抵抗を減らして、本来の力を最大限発揮する戦略を取りました。2人の息をぴったり合わせることに集中したのです。

——練習は順調でしたか。

西海 最初はうまくいかず、意見が衝突することもありました。精神的にも苦しかったのですが、でもレースを重ねることに改善され、雰囲気もよくなりました。

宮下 僕たちは寮の部屋も一緒なので、練習で雰囲気が悪いと逃げ場がありません(苦笑)。でも、レースの2週間前、逆風の中で速いタイムが出たとき、「これはメダルに届く」と確信しました。

——厳しい練習と学業の両立はいかがでしたか。

宮下 高校時代は3年間皆勤でした。大学でもこの姿勢を大切にして、すべての授業に真摯に取り組んでいます。教職課程も履修しているため授業数は多いですが、時間を有効活用し、計画的に履修

すること、両立を図ってきました。

西海 僕は4年生の1期までに単位をほぼ取り終えていたので、インカレに向けて競技に集中できました。授業の先生方も端艇部の活動を応援してくださり、とても励みになりました。

——多くの方々の支援があったと思います。

宮下 両親のしている前で優勝できたことがうれしかったです。先輩方からもお祝いの言葉をたくさんいただきました。

西海 今回優勝した艇は、大学と端艇部OB・OGの方々の支援で購入したものです。父母の会からもレース前に栄養補給ゼリーを送っていただき、感謝しています。

——これからの抱負を聞かせてください。

西海 実業団で競技を続けて、日本代表として世界レベルの大会でメダルを取りたいです。

応援してくださった皆さまに、心から感謝を申し上げます。

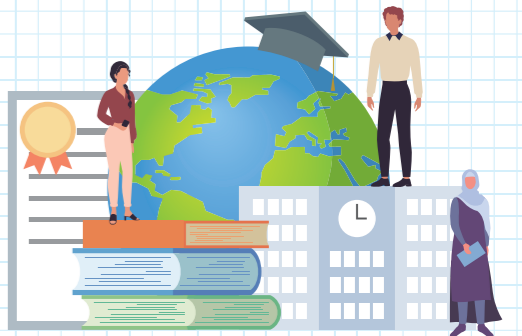


共に学び、

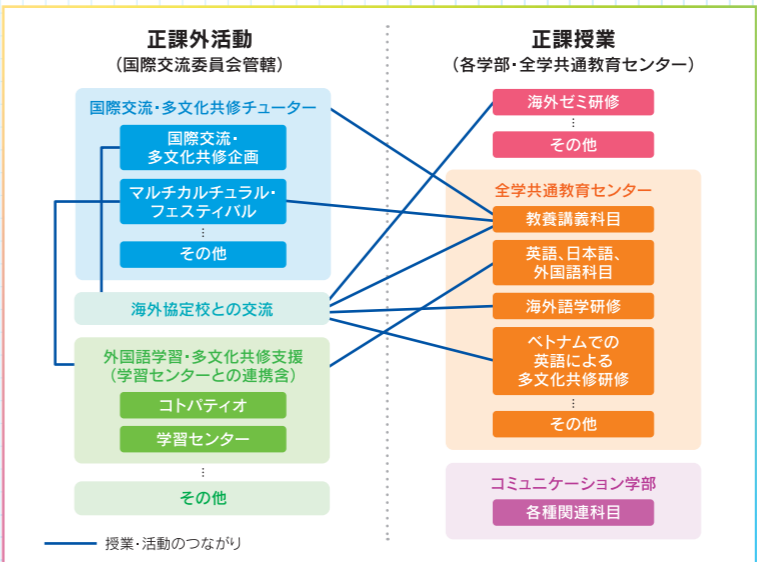
学生がつながる
新しい大学の姿

共に創る

国際交流委員長
教授 関 昭典
全学共通教育センター



あるため、複数の取り組みに関わる
ことになっても、常に高い意欲と責
任感をもって行動しています。こう
した学生たちの存在により、これま
で相互の関連をあまり意識せずに実
施されてきた取り組みが有機的に結
びつけられ、学内の国際交流・多文化
共修活動の一体化が進んでいます。
チューター学生の主体的な関わり
が、まさに本学の多文化共修を推進
する原動力となっています。



▲多文化共生に関連する授業や、国際交流・多文化共修の取り組みのネットワーク化

東京経済大学はこの5年間、「国際交流」からさらに「多文化共修」の理念を大学の中心に据えて教育改革を進めてきました。本学では、多文化共修を「多様な文化的背景を持つ学生等による学びの場において、その文化的多様性を生かして協働し、学び合うこと」と定義しています。この理念は、国籍や言語の異なる学生が交流する国際交流にとどまらず、互いの文化的背景を理解し、多様な文化背景を持つ人々が多様な文化背景を資源として生かすことを意味しています。

つなぎ、有機的に結びつける役割を果たしたのが学生たちです。かつては国際交流や多文化共修に関心を持つ学生が複数の取り組みを個別に掛け持ちしていましたが、2022年度に導入された**国際交流・多文化共修チューター制度**の充実により、この分野に関心をもち、30名の学生が中心的な役割を担うようになりました。チューター学生が大学全体の取り組みに横断的に関わることで、従来は点在していた活動が一つのネットワークとして結びつき、本学の国際交流・多文化共修の取り組みが体系的かつ可視的に展開されるようになりました。

マルチカルチュラル・フェスティバルも、このネットワーク化の象徴的な一例です。長年開催されてきた英語プレゼンテーションコンテストに、新たな取り組みである多文化共生フォーラム、ASEAN諸国3カ国6大学とのオンライン多文化共修プロジェクト、さらに18のゼミが長期休暇中に実施する海外ゼミ研修や海外語学研修の成果発表、学内



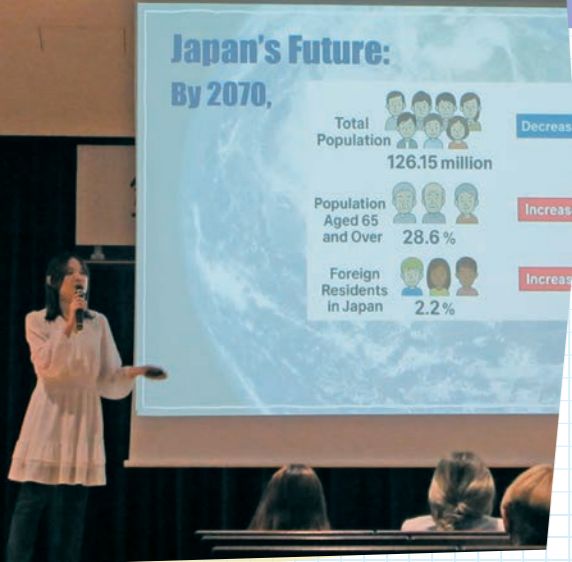
▲国際交流・多文化共修チューターによるイベント

での多文化共修に関する展示などを加え、「多文化祭」を意味するマルチカルチュラル・フェスティバルとして一体的に再構成しました。これにより、学内外の多様な取り組みが一つの場に結集し、留学生を含む学生・海外協定校の参加者・教職員が同じテーマのもとで学びを共有できるようにになりました。また、その運営主体を教職員から学生へと移行したことで、学生が企画段階から参画し、リーダーシップを発揮する機会が大幅に拡大しました。こうした学びの主体の移行は、本学の多文化共修を「指示される活動」から「自ら構想し創り出す学び」へと転換させる契機となっています。

語による共修研修です。両大学の学生が約2週間にわたり協働し、英語での議論や共同プロジェクトを通じて、多文化環境下での協働的学びを深めています。この研修は、2025年度に全学共通教育センターの特別授業として開講され、英語力と多文化共生力の双方を体系的に育成する実践的な教育プログラムとして位置づけられています。

どまらず、本誌で紹介したような多文化共修研修や国際学生プロジェクトなどを通じて、SDGs目標17「パートナーシップで目標を達成しよう」を体现する関係へと発展しています。学生がその中心的な担い手として積極的に参画し、学びの場が学内の教室からアジア全体へと広がる中で、グローバルな課題を共に考え、共に解決策を創り出す力が着実に育まれています。

多文化共修の推進は、単なる国際化の延長ではなく、学生一人ひとりが自らの文化を見つめ直し、他者と出会い、共に考えることを通じて「共生の知」を育む教育の営みです。本学では、こうした学びを正課・課外の両面から体系的に展開し、学生が他者を尊重し、協働しながら社会に貢献できる力——すなわち「多文化共生力」を育成しています。文化的多様性が社会のあらゆる領域に広がる現代において、他者と共に生きる力はすべての学びの基盤です。本学は今後も、学生・教職員・地域社会・海外協定校との連携を一層深め、「共に学び、共に創る」大学として、多文化共修教育を継続的に発展させていきます。



▲マルチカルチュラル・フェスティバルでの発表



▲ホーチミン市経済大学との共修研修

こうした海外協定校との実践的な共修の広がりは、ASEAN地域のトップ大学との協定締結にもつながっています。ベトナム、タイ、マレーシア、インドネシア、カンボジア、フィリピンなど、日本との交流に意欲的で学術的にも高い水準を有する大学と次々に協定を結び、教育・研究の両面で協働を進めてきました。これら

の連携は、単なる書面上的な提携にと

寄付者ご芳名

東京経済大学へのご寄付について

東京経済大学へのご寄付につきましては、卒業生、ご父母をはじめ学内外の多くの皆様からご支援ご協力をいただいております。皆様のご厚情に深く感謝申し上げます。
今回は前号掲載以降から、九月末日までにご寄付をいただきました皆様のご芳名をご紹介しますさせていただきます。
なお、ご本人様のご了解をいただいた方のご芳名を掲載させていただきます。
引き続き「『進一層』募金」へのご支援を賜りますようお願い申し上げます。

二〇二六年一月
学校法人東京経済大学 理事長 菅原 寛貴
東京経済大学 学 長 岡本 英男

学生支援奨学募金

大学奨学基金寄付金

※個人情報保護のためWEB掲載を控えさせていただきます。

寄付者ご芳名

【陸上競技部】

【卓球部】

【柔道部】

【バレーボール部】

【ワンダーフォーゲル部】

【アメリカンフットボール部】

【スキー部】

【合気道部】

【少林寺拳法部】

【バドミントン部】

【ヨット部】

【剣道部】

【硬式庭球部】

【ソフトテニス部】

【サッカー部】

【ラグビー部】

【軟式野球部】

【射撃部】

【ゴルフ部】

◎文化会

【演劇研究会】

【クレークラブ】

【証券研究会】

【サイクリング愛好会】

【税法研究会】

【PMA】

【落語研究会】

その他の寄付金

大倉学芸振興会への寄付
2025年度地域みらいプロジェクト助成金

教育振興資金

経済学部

経営学部

コミュニケーション学部
現代法学部

キャリアデザインプログラム

スポーツ・文化振興募金における

ラグビー部への寄付の活用についてご紹介

ラグビー部監督 高橋 真展

「スポーツ・文化振興募金」によるご支援に心より御礼申し上げます。ラグビー部は、現在プレーヤー20名、マネージャー5名の部員25名で活動しています。8月の菅平合宿では、宿泊費・移動費を本募金から充当し、合宿を実施することができました。募金の支援により遠征の負担を抑えることができ、部員たちが部活動に集中できましたことをご報告いたします。ラグビー部は、現在関東リーグ戦4部に所属しております。昨季に続き今年も「3部昇格」を目標に、スローガン「必笑(ひっしょう)」のもと、東経大

らしい明るさと元気を大切にしながら週4回の活動をしております。夏合宿では格上校との実戦を多く積むことで上位チームとの戦い方を学び、チームの連携と個々のスキルを磨くことができました。その成果もあり、9月に開幕したリーグ戦では、過去3年間で4敗していた埼玉工業大学に勝利することができました。今後も一戦必勝で挑み、3部への昇格を目指し活動していきたいと思っております。最新情報はInstagramやブログで情報を配信しております。引き続き温かいご声援・ご支援をよろしくお願いいたします。



東京経済大学へのご寄付をお考えの方は
こちらからお願いいたします。

<https://fundexapp.jp/tku/entry.php>



本学が募集している各基金の詳細については、
東京経済大学公式サイトをご覧ください。

<https://www.tku.ac.jp/tku/kifu/shogaku.html>



各部・サークルへの
ご寄付をお考えの方 インターネットからのクレジット決済による寄付をお考えの方は、上記二次元コードより本学寄付金公式サイトのご寄付目的「スポーツ・文化振興募金」を選択いただき、下段の支援先欄からご希望の部・サークル名を選択のうえ、寄付方法・寄付金額を選択してください(任意金額の入力可)。

振込みによる
ご寄付をお考えの方 ゆうちょ銀行(郵便局)からお振込みをご希望の方は、校友センター募金室までご連絡ください。専用振込用紙をお送りいたします。
ゆうちょ銀行(郵便局)から直接お振込みをされる方は、以下の口座番号までお願いいたします。
ゆうちょ銀行 口座番号 00180-2-263663 加入者名 学校法人東京経済大学寄付金口
※払込取扱票の通信欄に寄付目的(スポーツ・文化振興募金の場合は支援先のサークル名も)をご記載ください。
銀行から直接お振込みをされる方は、校友センター募金室までご連絡ください。

寄付金に関するお問い合わせはこちらまでお願いいたします 総合企画部校友センター募金室 TEL 042-328-6100 E-mail bokin@s.tku.ac.jp

アドバンスプログラム
推進基金寄付金

安城記念奨学基金寄付金

国際交流奨学基金寄付金

スポーツ振興基金寄付金

研究奨励募金
研究奨励基金寄付金

キャンパス整備募金

東経の森・水と緑の募金

◎体育会

【硬式野球部】

【硬式野球部】

修学支援特別奨学寄付金

スポーツ・文化振興募金

ゼミナール等支援募金

※個人情報保護のためWEB掲載を控えさせていただきます。

学生生活を支える新交流拠点の名称が決定! 『葵テラス』に込めた伝統と想い

名称募集にご協力いただいた皆さま、どうもありがとうございました

創立120周年記念事業「国分寺キャンパス第2期整備事業」の一環として建設が進む新施設の名称が、この度『葵テラス』に決定しました。

この名称は、本学学生・卒業生・教職員を対象に公募を行い、寄せられた107点の応募の中から、名称選考委員会の厳正な審査を経て、田邊真敏現代法学部教授が考案した名称が採用されました。



整備計画

2025年	2026年9月	2028年7月
着工	葵テラスEAST 供用開始予定 → 食堂、メインラウンジ、音楽練習室、ダンス室、ミーティングルーム、ラーニングcommons等	葵テラスWEST 供用開始予定 → 部室、小ホール、多目的室、ラウンジ、書籍・購買店舗、半屋外イベントスペース等

田邊教授は、名称について、「大倉高等商業学校から親しまれてきた『葵』を残しつつ、現代的な『テラス』を組み合わせたと語ります。特に「テラス」は、学生の自由な交流を促し多様なキャンパスライフを支える新施設のコンセプトを象徴します。また、「葵」には、武蔵野の青空と緑、環境技術といった意味も込められています。田邊教授は、「用事がなくても気軽に立ち寄って、自然と人が集まる空間、そんな学生の居場所になってほしい」と期待を寄せました。

本学の伝統を継承し、未来への発展を象徴する『葵テラス』は、今後、皆さまに愛される施設となることを目指します。

『葵テラス』は、従来の「葵陵会館」(学生食堂、小ホール等)と「学生会館」(部室、音楽練習室等)の機能を統合した複合施設です。雨天時にも活用できる半屋外イベントスペースも備え、学生生活を支える多機能な交流拠点として計画されています。

経営学部 北村真琴ゼミ 「販促コンペ」で学生賞獲得!

経営学部 北村真琴ゼミの学生3名が、株式会社宣伝会議主催の「第17回販促会議 企画コンペティション」(販促コンペ)に応募し、見事、学生賞を獲得しました。この「販促コンペ」は、協賛企業の課題に対するプロモーション企画を公募するコンテストで、学生からプロの社会人まで幅広い層が応募します。今大会の応募総数は5,195件にも上り、審査通過の難度の高さから、今回の学生賞獲得は極めて価値ある成果です。

今回受賞したのは、山田颯桜さん(経営3年)、相原幸村さん、庄司陽城さん(ともに経営2年)の3名です。マースジャパンリミテッドの「M&M'S®」のブランドファン拡大、若年層の取り込みができるアイデア」という課題に対し、企画を提案しました。

経営学部 小木紀親ゼミ 「地域連携スチューデントアワード」で 最優秀賞獲得!

経営学部 小木紀親ゼミの学生チーム「ワンダースプーン」が、西武信用金庫主催の「2025年度 地域連携スチューデントアワード」に出場し、最優秀賞を受賞しました。

このアワードは、地域企業の独自技術と大学生の斬新なアイデアを融合させ、新たなビジネス創出を目指す産学官金の連携プロジェクトです。入賞アイデアは商品化も視野に、地域企業とのマッチングが展開されるということです。

今大会には、本学を含む4大学から合計8チームが参加しました。最優秀賞を獲得した小木ゼミは、「セミオーダーレッシング」というアイデアで、タミー食品工業株式会社の技術を活用し、「知り合いに教えたいくなるようなワクワクする調味料」について発表しました。

東京経済大学報 第58巻第2号(新春号)アンケート

アンケートにお答えいただいた方の中から抽選で10名様に東経大グッズをプレゼントさせていただきます。右の二次元コードから、ぜひご回答をお願いします。



本学卒業生で写真家・エッセイストのハービー・山口氏(1973年卒)が表紙写真を担当! 大学の今を皆さまにお届けします。

撮影後記

ハービー・山口氏より

冬至を控えた冬の午後、半年ぶりに母校を訪れました。母校を訪れると、懐かしさと同時に、今の自分が試されているような緊張感が入り混じった気持ちになります。

今号の撮影に協力いただいたのは、経営学部の北村真琴ゼミの皆さんです。「販促コンペ」で活躍した学生たちと表紙撮影を行いました。午後の日差しがキャンパスのベンチに差し込み、彼らの屈託のない笑顔が素敵でした。その後、教室でゼミの皆さんと撮影を行いました。私の学生時代(1970年)とは異なり、学生たちのファッションの洒落たことに驚きながら、シャッターを切っていました。社会に出てからのさらなる活躍を、心から祈らずにはいられませんでした。

